討論資料　文連（有志）

7月の段階において大新斗争は一定の集約をむかえたが、大新斗争が「処分白紙撤回」で全て終結していくのか、あるいは、さらに主体そのものの総括を目指して前進していくのかということは、大新闘争前はいうに及ばず、大新斗争に結集してきた、われわれにとって非常に重要な事としてある。

すなわち、拡大マップ共斗会議以前以降の方向で進むべきなのかということである。

★現状認識――

われ拡大マップ共斗会議のそのほとんどが、「処分撤回」の斗いとして、物質的に言えば、学内の帝国主義的再編物件として大新斗争に関係してきた。それ故、合目的に行なうことの矛盾的表現を明確に位置づける事はなく、問題意識から遊離してくる恐れもしれない。しかし、「帝国主義的再編＝処分」撤回のレヴェルで斗争を終結させるならば、大学新聞但馬の、特殊な問題を抜きにした事になり、「何故大新斗争に関るのか」という本来的に出されてきた設問に対しては極めて皮相な一般的な答しか返って来ないであろう。

問題はここである。以前＝すなわち、処分が行われ斗争が開始される以前の期大新聞と自己との関係性はどうあったのか。どこが問題点であり、どこが変革されねばならないのか――ということであると思う。

すでに何回にも渡って編集部が語ってきているように、管理者＝大学当局の御用新聞としての大学新聞を否定し、資本と权力に屈服しない「斗うメディア」を創出する。と、さて、「斗うメディア」とは一体何であるのかということが問題となるのであり、それの全体性を把握し、かつ具体的方針を設定し、われわれ学生に参加していくことが、まず第一の合法的獲得目標であると思う。

☆メディアの一形態としての大新――コミュニケーション体系の変革

資本主義的生産様式をとるコミュニケーション様式は必然的に秩序安定維持者のイデオロギー的攻勢をなげている。そこにおいて、メディアは、ブルジョアジーに一指しも支配されているが故に、社会的に波紋を呼び起すような事件、言論、思想は、ごく当然の事としてカットされていく。すなわち、コミュニケーションは支配する者から支配される者への経路をとり、「縦」の関係が維持される。このような関係性の中にあっては、問題意識（問題提起）が存在する余地はなく、マスコミのように送り手と受け手を明確に区分することもブルジョアメディアはその本質としていると思われる。

この疎外された「コミュニケーション体系」は、ブルジョアメディアの機能→それにとって支配するものの創出として結論づけられるだろうが、果して、現在的な方法は何であるかということである。それは、極めて具体的・日常的な次元でのメディアの変革としてあるであろうし、「斗うメディア」一事をメディアなら事えるべきであろう。

すなわち、当面の問題は、われわれマップ共斗が今力でもって大新を「斗うメディア」へと質的に結晶させる部隊とならねばならないことである。

☆意識と存在の分離について――

・斗うメディアを創出するには、メディアを創っていく主体そのものが質的に斗う者へと変革していかなければならず、それを抜きにした「斗うメディア」は斗うメディアにはなり得ないであろう。われわれは常にそれを目指すために前提としての次の問題を提起する。

「七〇年代階級斗争が開始されすでに二年を経過しようとしている。その過程で多くの部分が六〇年代型斗争を止揚し、七〇年代型斗争へ、ということを言ってきたが、われわれもまもなく、決して六〇年代型斗争を活用しているものはないと考えられる。六〇年代型斗争とは次のように考えられる。

学生を階級斗争の本質を形成し、そこにおいて学生の変革――すなわち、生産関係に直接関与せずにいること、このことから起因するところの社会的・経済的に中間・小ブル層であること、――を一切、切り捨てた形で、学生のセミナーテリアニチヤ的な要素にのみ依拠したところで運動をやっていくこと」であり、

マルクスはこう教えている。「存在が意識を決定する」

と。資質的存在としてのブルは、問題に関するわれわれが、果して、相対的に正しく状況の意識と斗いとを展開できるか？

われわれの基盤が極めて不安定、不安定であることを自覚する人はまずいないであろう。したがって、われわれが斗うメディアを指向する所にあっては、まず、われわれの意識と存在が、過去に多くの革命家たちが語ってきた「プロレタリアートという存在と意識とは、とてつもなく大きな隔たりをもってもっているのではないか？」と疑うべきである。

現に、われわれの中に、果して何人、毎日一ブルジョアジー性に自らの存在力を切り売りしなければ生きていけないような階級性がいるであろうか。ブルジョア性をデッチ上げ、それは生きて行けないという人が何人居るであろうか。

基盤が不安定であるが故に、大学もミニ四斗になって就職のことが問題になってくると運動をやめこしまう人が多い。学生のうわべやっているうちは行きになっても運動を継続するという保証などどこにもないのである。逆に、学内者になったが嘆しいであろう。

★実践的に「やるんだ」といったところで、われわれは、通常、卒業、就職、結婚、食べ、寝、子育ての問題を通りすぎてしまうと、なんとなくなる、方式に運動をやっていってはならないのである。われわれは、そういった現実の、不可避な要素をくみ込んだ問題で、創造、飛躍して行く必要がある。

一般的原理として、存在が意識を決定すると先に述べたが、能動的な意識は存在を変えることができるというのも真であると考えられる。決して「決意」のみではなく、現状と自己を冷静に分析し、どうしていくのかという方向性において、自覚意識性と具体性を確立して行かねばならない。

自覚意識的に自己の存在基盤を変革していくことによってわれわれの内部は矛盾（すなわち、存在は「非」革命的であっても、意識としては革命的）は止揚される。（民論）

※又「斗う」ことを宣言しているが故に、近い将来に当局が「鍵を切る」であろうことは疑きいるし、それにもまして、「自立化」の為の組織化を行わねばならない。

★・斗うメディア・メディアの革命の為の方針（われわれが、それを保証してゆくものとしてマップ共斗を位置づける）

・展望としては、力ある編集行為をはじめとしながら、様々な斗い（学生運動はもちろん、労働運動、農民運動との結合をもち、マップ共斗それ自体が統一戦線として活動していく。

（以下略）